

出席している，ということ

——授業出席行動の社会心理学（1）GPA 視点の場合*

後藤将之

1. 問題

学生が授業に出席する，ということは，いっそう具体的には，どのような事態をさすのだろうか。また，そのことには，より詳細に言って，どのような含意があるのだろうか。この問題について，現実的な見地から，社会心理学的に検討することが本論の目的である。

筆者が最初に大学の教壇に立ってから，30年弱が経過している。この間，1年間の海外研修や，病欠などの時期を除いて，毎年度必ず，専任および非常勤講師として，各所で講義と演習，実習の授業を分担してきた。本論では，この期間に得られた筆者自身の教育経験からの実例と体験をも援用して，この課題を論じる。なお，以下の本論で示される実例や体験は，きわめて多岐にわたる教育実践の現場で多年の間に得られたものであり，どこか特定の学校や組織に関するものではなく，本論は，何らかの批判や揶揄を意図したものではなく，事実の把握と問題の解決を目的としている。ここに示すような各種の事態は，社会状況および社会構造の変動と混乱の反映であって，学生や教員個々人の資質などが主因ではないと了解している。なお，経験した実例の引用にあたっては，意図的に，時間と場所を曖昧化して示す。

例によって，教室という空間で発生する多くの出来事と同様に，表面的な事態ならきわめて明瞭である。授業開始のチャイムが鳴って，出席管理

者が出席を取り始める。出席を取る方法は各種あるが，学生各個人へ配布した出席確認カードに名前などを記入させて回収する，そのクラスの受講者リストを教室内に回して当人に自分の名前にチェックをつけさせる，あるいはもっとも単純に，出席管理者が受講者名簿を読み上げて，当人に挙手させる and/or 「はい」と答えさせる。英語ならば「はい，います Yes, present!」と答える。この出席者名を，手元の名簿上でチェックしていけば，点呼が完了する。表面的にはまったく何の問題もないかみえる。

だが，出席管理者（それはしばしば，成績評価者，つまり教員が兼務している）が，この一見して明瞭な事態について疑問を抱き始めるのは，次のような出来事に遭遇した場合である。

1-1. 「代返」と「もぐり」

「回収した出席カードの枚数，名簿に当人達がつけたチェックの総数，あるいは『はい』と聞こえてきた声の総数が，現実の教室内に物理的に存在する頭数と，不一致であるとき」。つまり，客観的証拠としてその後まで残る書類上の記録よりも，（ほとんどの場合に録画されていないため記録が残らない）教室内の頭数が，多かたり，少なかつたりした場合である。

現実の頭数が少なかつた場合，すぐに想定されるのは，「誰かが2人分，記入や発声をした」つ

まり、いわゆる「代返」の可能性である。他方、現実の頭数の方が多かった場合、「非受講生の存在」いわゆる「もぐり」が考えられる（つまり、その場に存在しながら、履修登録はせず、自分の名前がリストにないので、出席だと回答しなかった者がいる）。

さらに厄介な可能性として、以上2つの事態が同時に発生していて、結果的に合計が多少ズレている場合も理論上はありうる。5人分の「代返」があって、6人が「もぐり」に来ていれば、出席回答数と頭数では、頭数が、差し引きプラス1になるだけである（が、実際には、合計11人が、不適切な出席行動をしている）。5人の「もぐり」が、5人の欠席者の「代返」（この場合は、自分自身の名前は書かず、誰か欠席した受講者の名前を1回だけ書くこと）をすれば、表面上は、回答総数と現実の頭数とは一致するが、実際には10人分の不正行為が発生している（5人の欠席が記録されず、5人の非正規の存在が記録されていない）。なお、事前の学生証の貸し借りがあれば、こうした各種の「なりすまし」は、学生証チェックだけでは突き止められない（もっと言えば、そこに貼られた本人の写真は、そもそも、現時点での本人自身とすら、一見してまるで似て見えないこともままある。現状で学生の多くはアルバイトをしており、そのバイトの一定数では、それに相応しい外見をする「外見労働」という感情労働（Hochschild, 1983）の一種が求められる）。そして学校は捜査機関ではないから、これ以上の追及は難しい。

1-2. 途中入退出

「出席カードを記入したり、名簿にチェックしたり、『はい』と発声したその直後に、退出する学生が目にとまった時。あるいは、カード配布後

や、名簿が回覧されたあとや、名前が読み上げられた後になって、入室してきた学生が目についた時」。前者は、実際には受講しない学生が、出席だけを（おそらく一応は正式の手段によって、つまり本人がその場にいて）主張したがる場合。後者は、遅刻したかもしれないが受講する可能性もある学生が、出席を（その入室時点では）カウントされていない場合。一般的には、前者は「チート（ズルい）行為」であり、後者は「損をした行為」とみなされよう。ただし、前者にしても、本人自身が出席し、退出している限りにおいて、全面的な「代返」行為よりも、相対的に言うならば「出席度、参加度」は多少なりと高いともいえるだろう。後者の場合、「出席をとってもらえなかったにも関わらず、教室内にいた時間」分についてカウントしてほしい、という希望が、後から出される可能性もある（これに逐一対応すべきかは、議論が分かれる問題だろう）。

1-3. 両者の混在する場合

以上の1-1および1-2は、しばしば平行して発生する。ある者は誰かの「代返」をしている。（ちなみに、さらに場合分けすれば、「自己犠牲的な代返」もありうる。出席カードを知人の分も入れて2枚書く（ありがちな代返）ではなく、1枚だけに、自分ではなく知人の名前を記入することで、本人は、他人を出席していることにするため、欠席扱いとなる場合である）。ある者は「もぐり」である。ある者は出席が取られた後に退出する。ある者は出席確認プロセスの途中から入室してくる。これらが同時に発生すると、ほとんど「誰が、いつからいつまで、入室・滞在しているのか」を、明確に特定化することが不可能な状態が発生する。100人規模の大教室でこれが一度に発生すると、孤立無援の教員一人だけでは、出席管理はき

わめて困難な営為になるといわざるをえない。

1-4. 群集としての学生

20人程度の小規模授業をゼミ室などで実施している分には、個人が顔で特定化しやすい。とはいえ、もちろん、100%の特定はできない。たとえば、風邪と称して、マスクと帽子で顔がまるで見えない「学生（と想定される人）」が、まま教室内に存在する。風邪と自称するので、声もよく出ないと主張する。風邪がうつるのでマスクは取れないし、寒気がするので帽子も外せない、と主張することもありうる。そんな病人が出席しても勉強にならないだろう、というもっともな指摘は、教員が医師ではなく、出席が自由意志による学生の義務の遂行である以上、できない。欠席を強要することは、指定の伝染病などの場合以外にはできないので、実際に感染性の高い流感に感染している場合などは、周囲の学生や教員にも被害が波及しうるが、本人にとっては、その授業回への出席が、死活問題となる場合もままある。

大教室で、人数も50人を超えたあたりからは、実感として、「人称性をもった個人の集まり」として出席者を把握することが困難になり、「とにかく大量の人（見知った顔も中にはいる）の集まり」という程度にしか識別できなくなる。AV提示を行うために室内を暗くしたりすれば、ほとんど藪の中状態になってしまう（このあたりは教員の視力や視覚にも依存して決まる）。つまり、不特定多数の大衆、または静かな状態にある群集を相手にしているような印象が出てくる。これらは紛れもなく社会心理学の研究対象である。

なお、上のような出来事のうち、一定タイプのものは、「正当な行為」とみなされやすい傾向がある。例えば女子学生の場合、「お腹が痛い」に類する主張は、そのまま、それ以上追及されるこ

となく、退室する（そして戻ってこないが、しばしば途中退室扱いにもならない）ことの適切な事由とされやすい（無理もないともいえるが、相互作用場面における男女差を検討した社会心理学の研究書もすでにある（Fingerson, 2006）。ちなみに男子学生では、身体生理関係による退室はあまりないだろうが、たとえ過敏性大腸症候群を患っていても、いっそう退室事由を追及されやすい傾向があるだろう）。

これ以外にも、あらゆるタイプの「教室内に存在しない（しなかった、しなくなる）ことを正当化する」ための、理由や証拠類がある。これらはきわめて多岐にわたる。それらのうち、比較的現実なもの、本人が指定された伝染病などに罹患している診断書と、父母および兄弟（とおそらく配偶者と子供）の死亡報告だろうが、あいまいな診断書や、あいまいな親族（遠隔地に居住の祖父父母など）といった場合も、理論上ありうるだろう。

近年の大学の授業については、しばしばネット経由で一般公開される「シラバス」（講義要綱）が存在し、そこには「成績評価の基準」も明記されることが多い。そこでは、「出席」はいちいち明記されないこともあるが、これら成績評価基準のうちの、重要な1つであると認識されやすいだろう。端的に言って、出席がよければ、よく授業を聞いていたはずだから、成績もよくなる可能性が一定程度あると考えられやすい。欠席回数が一定の限度を超えると、自動的に履修不可能となる学校も多い。

であるなら、「出席している、ということ」（あるいは、そのように通用すること）は、学生にとって、死活問題とみなされやすい状態だといえよう。少なくとも学生たちは、高校までの公教育では、そのような経験を積んできている。しかし、それは、さらに具体的には、どのような意味を

もった行為なのだろうか？

2. GPA 視点からみた出席行動

一口に学生といっても、きわめて多岐にわたる。本論では、学生を、便宜上、GPA 視点を強く持っている場合と、そうではない場合に大別して検討していく。

ここで「GPA視点 Grade Point Average perspective」とは、1960年代終わりに、アメリカの社会学者ハワード・S・ベッカーらが提出した概念であり、大学の授業において、獲得される成績（GPA）こそを何よりも重要だとみなす、学生における心理傾向のことを意味する（Becker, Geer, and Hughes, 1968）。「よく勉強していることは、学生が得る形式的な制度的報酬で測定される。学業での主要な報酬は成績なので、成功とは「よい」GPAを得ることである」（*ibid.*, p. 34）。結果主義、成績第一主義の立場である。

GPA 視点にも色々な場合がありうる。さらに、ある特定学生が、ある授業ではこの視点を採用し、別の場合にはそうではない場合などもありうる。ここでは仮に、「純粋な GPA 視点」として、「最小のコストで最大の GPA を得ることだけを唯一の目的とし、その他は何も求めない」場合を想定しよう。この場合に最も望ましいのは、「いっさい何一つとして、その授業に関連する行為を行わず、コストを払わず、ただ成績だけは、Aプラス（または最高評価）が貰える」という非常に低コスト高リターンの事態だろう。つまり、Aプラスが欲しいと思った授業について、そう希望すればそれだけで（あるいは希望するという精神的な努力すらなく）、事前の履修登録もせず、一切の出席も一切のテストも提出物もなく、それでもただ、成績表にはAプラスと印字されるという、涅槃的な事態である。一見してこれは、ありえなさ

すぎて虚しくなるのでは、と思えるほどの処遇であらう。これならば「もっとも涅槃的な成績の出し方」ともみえるが、実際には、これでもまだ、必ずしもそうではない。

筆者は10年以上昔に一度、ある大学の授業で、あまりに学生の履修態度に問題が大きかったとき、次のことを言ってみたことがある。「君たちは、この授業を聞きたいのではなく、この授業でいい成績がほしだけなのだろう。私も、そういう関心のない学生さんたちに授業をしたいわけではない。ならば、これから一切授業をせず、それでも全員に必ずAを出す。これで両者ともに満足だろう。どうだろうか？」。もし本当に、この事態に至ったら冷や汗ものだったが、この提案に賛成した学生数は6割程度にとどまった。大きな議題なので、全員一致でないため、実施しませんでした（全員一致した場合、さらに抜本的に色々検討することが出てきただろう）。

ところで、この提案に同意しなかった学生の理由は、「全員Aでは差がつかないから」だった。つまり、「一度も出席せず、何もせずにAがもらえる」だけでは、まだ彼らとしては不足だった。「一度も出席せず、何もせず、かつ、自分だけが、他よりもよい評価としてのA（あるいはAプラス）がもらえる」でなければ満足しない、ということなのだった。以上は、一見してまったく荒唐無稽な、例外的な話題とみえるかもしれない。だが、学校がサービス業として認識され、その学生がGPA視点を強く持つということは、結局はこのような可能性をも含んでいるのだと、やや極端な実体験からであれ、言わないわけにいかない。

2-1. 成績評価の構成要素1：GPA 視点の場合

もしある学生が、強いGPA視点を抱いているとして、この学生にとって、ある「授業科目」は、どのようなものとして認識されるだろうか。恐らくそれは、講義される内容とはとりあえず無関係に、「クリアすべき一連の条件群、あるいはトラップ群」として見えているにちがいない。そしてそれらのクリアすべき条件は、「シラバス」の「成績評価の基準」に明記されている。いっそう説明的には、「必要な回数、授業に出る」「要求される質問、小テスト、課題などに適切に対応し、提出物を適切に提出する」「期末テスト、期末レポートなどを適切にクリアする」「授業中の私語や内職などに関して明記された要求に、適切に対応する」などである。理論上は、これらの基準を適切にクリアすれば、恐らく一定程度の高い評価が得られるだろう。これらの基準を、GPA視点から、さらに詳しくみていこう。

2-2. 出席

まず授業への出席であるが、強いGPA視点では、成績のみが求められ、内容やその理解はどうでもいいことになりうるため、出席という高コストの行為についても、「最低限度、どれだけ出席すればいいか」が重大な関心事となりうる（あるタイプの人は、90分授業に15回出席すれば22.5時間だが、これが時給900円のバイトだったなら約2万円の所得になったはずだと考える）。もし仮に、シラバスなどに「全授業回数の3分の1以上欠席したら単位は出ない」などと明記されれば、これを逆に理解して、「3分の1以下までなら欠席しても問題はない」さらに都合よく読み込んで、「3分の1までなら休む権利がある」という意味合いに解釈される。ここで、もし全授業

回数が15回なら、5回までは「休んでも問題ない当然の権利」になるから、つまり出席すべき回数はそもそも10回だけである。要するに「9回出席なら（厳しい評価をされると）不可になりうるが、10回出席ならもちろん合格のはずだ」という権利意識となる。この差の1回分以降が、交渉の話題となりうるわけだ。

続いて、ある特定の授業回において、「出席している」という判定を確保するために必要なことは何だろうか。もし「遅刻を20分まで認める」とシラバスに記せば、つまり19分59秒遅れて教室に入室できれば、「出席と認められるはずだ」ということになる（そこで、授業中であるにもかかわらず、教卓まで走って行って、いま出席してきた旨を教員に告げ、その後すぐに、悟られないように退出すれば、それでも出席となりうる、と、この学生は考えるかもしれない）。要は、出席簿にマルが付くという事態だけが意味を持つので、それ以外での教室内への滞在は、時間の無駄だという意識すらありうるだろう。

出席管理をめぐるチート行為については、すでにある程度指摘した。「代返」「自己犠牲的な代返」「もぐり」「途中入室」「途中退出」などの変則的な出席行為がありうる。大学には捜査権が特にないので、あらゆる変則的な、真偽性と正統性のあやうい「教室にいないことを正当化する証拠」が準備される。いつ発行されたか分からないほど黄ばんだ「電車遅延証明書」、同じくそのコピーや、明らかに改変されたらしいもの。同じ路線利用者の多くが現に間に合って出席しているにもかかわらず提出される交通機関の遅延証明（つまり遅延がなくても遅刻していた可能性がある）。あるいは、真偽や関係性が曖昧なバイト先などが発行した、別所で雇用されている旨の証明書、などなどである。

これらと反対に、「もぐり」の人物が紛れ込んでいる場合もありうる。教室内で、「もしもしー、あー、俺さー、いま〇〇大学来てんのよー」などと大声の携帯電話で会話している場合、文脈から、どうしても学外者の可能性を疑いたくなる（が、捜査権があるわけではない。身分証明書の貸し借りはないと信じたいが、こういう場合には、悩みたくなる）。昔から、空いている大教室の後方に座る学生はいたが、冷房のきいた後部座席が、近隣の学生同士の社交場になっている可能性もある。それを言うなら、授業潜入についてのハウツー本が商業出版されたこともあるし、その体験を掲載した匿名ホームページも各種ある。

かつて教室は、一種の神聖な場所として、敬意を払われたり畏れられたりしていた。教員もまた、クセの強い、権限を多く持った人間だった。「教室へ入ったら、他のことは全て忘れる」といった格言は、筆者も若い頃にどこかで聞かされた。これらから、とりわけ授業中に教室へ気軽に出入りすることは、基本的に憚られた。しかし現在、高等教育の大衆化とともに、教室への敬意も失われつつあるようだ。このような状況では、これまでみられなかったタイプの出席行動も出現するようになっていく。

たとえば体調がよくない時に出かけた映画館で、出入りを繰り返しても、特に問題視されることはないだろう（周囲に迷惑がかからない限り）。同様に、講義中の大教室に、何らかの必要があって出入りを繰り返したところで、特に問題はない、と考える学生がいても（このアナロジーが成立しているならば）不思議ではない。90分の授業中に、数回も出入りを繰り返す学生は、現状でもまだ珍しいだろう。しかし、このような出入りが繰り返される状況がみられた場合、そこでの「出席」は、どのように評定されるのが妥当だ

うか。

もちろん本来であれば、1回の授業はひとつのまとまった全体を構成しているので、そもそも間欠的に見聞きして意味が通じる性質のものではない。しかし、ここで論じているのは、強いGPA視点をもった、つまり授業内容そのものはどうでもよいと考えている、学生の場合である。90分の授業のうちに、4回の途中退室と途中入室があったとする。それぞれ5分間の退出だったとする。ならば合計の不在時間は20分であり、これは、聞かなかった授業時間総量としては、「20分遅刻した」とことと違いがない。つまり、これだけから言えば、遅刻20分を認めるなら、このケースも認めないと不公平になりかねない。

この学生の「出席」を、開始時の1回と途中の8回、計9回、手作業で記録しつづけることは、出席管理者にとって、ある程度の負担になると考えられる。教員がこれをすれば、授業は何度も中断されて、他学生からの苦情が出かねない。しばしば現在の学生は、同じ教室で同じ授業を履修していても、その事実に起因する連帯感のようなものは共有していない。「教員と黒板以外はいっさい無視する」というのは、ある意味、とても良好な受講態度であるが、他学生への対応によって授業が中断しても、「そんなことは自分には関係がない」という権利意識ともなりうる。（あるいは、授業進度が遅れる＝出題範囲が狭まるので、むしろ裏では称讃されるかもしれない。）

そこで、次のような出席管理の自動化を考える。教室の出入り口を電子錠つきのゲートにして、鉄道の自動改札機のように、磁気カードでゲートを開かせる方式にする（跨ぎ超える者を監視する必要はあるだろう。この方式はすでに一部学校で試行されている）。記録された入退室データを合計して、たとえば「90分のうち合計70分

36秒だけ滞在＝出席した」というように集計する。もし途中入退室という行為が減点対象であれば、1回について2分の減点（つまり、トイレに1度、5分間だけ行って帰ってくれば、合計9分の減点）、などと集計根拠を明示する。この方式であれば、秒単位にいたるまで、出席の実態が記録できる。もちろん、磁気カードの貸し借りなどによるチート行為が存在しないと仮定する必要がある。もしそれが存在すると考えるならば、今度は指紋認証や静脈認証など、いっそう生体認証に近い判別装置を導入する必要がある（そしてそれは、今度は、真面目なタイプの受講者にとっては、プライバシー侵害への懸念を抱かせる煩瑣で余計な措置となる）。筆者は1987年からずっと大学で講義をし続けてきたわけだが、可能な努力を払っても、この精密な水準で「正確な出席を取った」と実感できたことが1度もない。筆者の理解では、教員は講義を実施する者であって、100人規模の履修者の位置情報を手作業で記録しつづける人力GPS装置ではないからである。

「大学のレジャーランド化」ということを、誰が最初に指摘したのか、現在、確証がない。だが、少なくとも70年代には、それは世間的に語られていた事態だったと記憶する。しかし、今にして思えば、当時いう「大学のレジャーランド化」とは、実際には「大学生の遊び人化と、その仮の宿になった大学」という含意であり、主として「学外（および学内サークルの学外活動など）で遊んでばかりいる大学生」についての批判だった。文字通りの「大学のレジャーランド化」、つまり社会制度としての大学本体に、娯乐的・快楽的・集客的なサービス業の要素が取り入れられることが発生したのは、筆者の理解では、90年代以後のことであり、「大学生き残り時代」が叫ばれるようになってからのことだ。この種のキャッチフ

レーズは、しばしばその時代の動向の正確な反映でないばかりか、それを仮想の根拠とした、後の時代における、さらに一步踏み出した決断に対して、実在していない裏書きを与える場合がままあるようにみえる。ちなみに、もし本当に大学本体がレジャーランド化しているのなら、本物のレジャーランドと同様の出入口管理をすればいいことになる。テーマパークや各アトラクションのゲートは、きわめて厳密に、多数の専門スタッフによって、常時管理されている。

あるいは、多くの学生が保有していて、しかも貸し借りは基本的に憚られるだろうパーソナル・メディアである携帯電話やスマートフォンの位置情報を、内蔵されているGPS情報によって、学校内にいる限りすべて常時記録し続ければ、位置情報の測定が十分に精確である限り、上と同様の出席確認（つまり「教室内座標と当人の位置情報が一致する時間の計測」）が、ほぼ自動的に行えるし、磁気カードもゲートも必要なくなる（ただし、トイレの滞在時間と回数まで計測できてしまうので、気にかける人がいるならば、情報管理が重要になる。ただしまた、犯罪対策やセクハラ・パワハラ対策にもなりうる。また、入力ロックした携帯電話＝GPS信号発信器を持ち込む、などのチート行為はありうる）。

あまりに馬鹿げた発想だと思われるかもしれないが、ここで論じているのは、あくまで強いGPA視点をもった学生の価値意識である。それは、可能な限りエコな資源投下＝できるだけ（あえて言えば）無駄な出席行動を節約すること、に動機付けられている。つまり、この視点では、煎じ詰めれば、授業15回のうち5回分の出席は、「正当な権利として節約できる作業（＝“無駄”）」なのだ。ここまでは当然の権利として“正当に”欠席し、あともう1回（以上）を、いかに効率的

かつ説得的に「節約」するかが重要な問題となっているわけである。

もしこのような意識をもった学生がいるならば、その価値意識や態度は、大学の授業に対する一種の冒涇ではないか、という感想が聞こえてくるようにも思える。その意見に同意できるものなら同意したい。しかし、必ずしも同意できない理由もある。このような学生が「不真面目」な学生であるとする（その意見自体には必ずしも反対しない）。もしそうであるのなら、あの、ずっと教室内に物理的には存在 present しているものの、出席が取られた直後から机上に突っ伏して、以後は注意されようとも名前を呼ばれようとも全く反応せず、どうやら毎回90分間ずっと熟睡しているようにしか見えない（が、それを実証する手段と資格を教員は持たない）、より目立たないがまま見られる、心理的には放心状態 absent な学生たち、彼らはいったいいかなる正当化によって、「不真面目」というレッテルを貼られることなしに、出席を評価されているのだろうか？

2-3. 質問, 課題, 小テスト

直前の疑問は、ある程度まで修辭的なものであって、実際のところ、筆者の講義においては、全ての授業中ずっと熟睡していても、あまり問題にはならない明瞭な理由がある。それはつまり、筆者は、毎期の講義において、自分が準備して講義に使用した講義ノートそのものを、学生に、ネット経由で、必ず期末試験前に配布している、ということである。

前出のシラバス主義は、授業の形式と内容を、あらかじめ固定化して公表することを要求するものである。講義を選択する前に、シラバスを検討すれば、その講義の毎回の内容の概要（つまり「全体の目次」）が分かり、その内容に対応する指

定テキストが分かり、成績の評価基準も分かる。このようにきわめて明証性が高いことは、受講者にとっては有利であるが、この事前の明証性は、つまり、わざわざ授業に出てくる必要すらなくしてしまいかねないものでもある。

理想的にシラバスに沿った授業を考えてみよう。講義日程は、そのまま、指定テキストの目次である。指定テキストは、一読すれば内容が判然とするほどに分かりやすく、余計な解説はいらないほど、明瞭に記されている（そうでなければ刊行されにくい）。講義は、このテキストをなぞる形で進行することになる（つまり本質的に冗長である）。講義の進行は、できるだけ、受講者全員がついてこられる進捗と難度で行われる。小テストや期末テストの出題範囲は、テキストの内容のみからであり、かつ、教員が説明した箇所のみからである。これらのいずれかの条件を満たさないと、それはシラバスからの逸脱として指摘されかねないものになりうる。

さて、このような理想的なシラバス主義の授業（筆者の授業は、シラバスが導入される以前の20年ほど昔から、ほとんどこのような形式だった）では、「出席すること」の意味は、あまり存在しなくなってしまう。なぜなら、指定テキストが一読すれば理解でき、しかもそこからの逸脱が許されないのなら、テキストを読むだけで授業の内容が修得でき、かつ、その内容を知るだけでテストにも確実に対処できるのだから、こと改めて出席する必要性が、ほとんどなくなってしまうわけだ。この方向で完成された授業は、「出席」という高コストな行為を、ほぼ不必要にしてしまうものである。「読めば分かる」である。

もちろん実際には、現場の教員は、毎回、色々な時事ネタを事例とした関連する話題や、エピソードや、考える手がかりなどを話すかもしれな

い。テキストには採録されていない具体例を補足するかもしれない。毎日が「生の上演」である講義を通して、一定の生き方や人生観、人間性などを提示するかもしれない。それらの全体として、テキストを自学自習するより以上の、何ものかが提供されているかもしれない。

しかしながらなお、それらの追加の知識や情報は、上のようなシラバス主義に忠実である限り、課題や期末テストでは、出題することができず、その修得をチェックできないものである（なぜならシラバスに明記された範囲外から出題されることだから）。したがって、強いGPA視点をもつ学生にとってそれらは、無価値、無駄、または「必須情報に対するノイズ」というしかないものになってしまう。この意味でのシラバス主義は、出席重視主義と、論理的にいつて矛盾するものだとすら言えるだろう。しかし、このことは間違ったことだろうか？

よくできた授業のテキストは、一読すれば、対象学齢の読者には、簡単に内容が理解できるはずのものだ、と筆者は考えている。この場合、教育とは、すなわち自学自習の独学とほぼ同一である（かろうじて、普段なら書店の棚に並んでいないテキストを指定されたがために、その存在を知る機会を得た、ということくらいが、教育指導instructionと呼びうるかもしれない）。そのテキストを一読すれば授業内容が伝達され、それを暗記すれば、期末テストも、その暗記度を反映した高得点になりうる。ここには、実際のところ、「出席」を必須とする単位取得上の条件は存在しない。では、なぜゆえに「出席すること」を要求し、数ヶ月にわたり、同一の時間に同一の場所へ来つづけることを、評価基準とする必要があるのだろうか。

指定テキストはしばしば商業出版物であり、毎

年大きく改訂することができない。となれば、変動の激しいジャンルでは、毎年改訂できる「講義ノート」（その内容の多くは公刊したテキストと同一だが、毎年の変化を反映して、部分的にたえず改訂されている）を、毎年ごとに配布した方が好都合だ、ということになる。じっさい、筆者はこの方式を、ここ20年ほど、ずっと採用しつづけている。

このような、手の内をすべて明示した授業では、「出席していること」の意味合いが、かなり微妙なものになる。何より、テキストや配布した講義ノートを自学自習してくれば、それだけで参照不可の期末テストでも高得点が取れるので、「出席は悪くても、期末テストの得点が高い学生」が、当然、存在しえてしまうからである。出席しなくても成績がよくなるなら、出席は無駄ではないだろうか？

とはいえやはり、全般的な出席の良好さは、受講時の真面目さとも対応しやすいので、このような学生の数は決して多くない。しかし、近年の筆者の授業（履修登録者数は約100名）でも、期末テストの単純得点（満点は100点よりも少し高い）で、さすがに上位3名は、出席もある程度良好だったが、4位だった同点2名のうちの1名は、かなりよくない出席回数だった。具体的に、「テスト得点を出席回数で割った数値」（つまり「1回の出席で得た得点」ともいえる）を試算すると、テスト得点1位の者では7.9だったのに対して、この4位の者では13にもなっていた。また、4位までのうちで、最もこの値が低かった者(5.7)は、ほぼ全回出席しており、4名中でもっとも出席度の高い者だった。すなわち、低出席度という「低コスト」しか支払わないにもかかわらず、高得点を得る「エコ」な学生はみられる。確かにこういった実例は決して多くはない。しか

し、例年、あまり授業に出てこなくても、期末テスト得点が高い学生は、現実に存在しているのである。

筆者はこの現実について、一方では、講義を勤勉に実施し続けることへの無力感を感じるとともに、他方では、自作のテキストや講義ノートやテスト問題の、ある種の「完成度」の高さを誇りたい気分にもなっている。じっさい、このような自学自習の可能性が低いならば、各国にある通信制大学や放送大学、ネット大学などの存在意義は微妙になってしまうだろう。以上の意味からは、「出席しているということ」は、いささか微妙な立ち位置にある評価基準であるともいえよう。

他方で、「出席しているということ」に固有の意味を与える評価基準もありうる。具体的には、授業内で実施される小テストや課題などである。これらは原則として、その場にいる（出席している）者だけが回答できるので（ただし、授業終了後に、「教室内で書いたが、提出は忘れました」などの理由付きで、持ってこられる場合もあるが）、その意味で、出席することに固有の評価になりうる。しばしばこれらは、直前の授業内容や、その理解に対応するものとして出題される。

ただしまだ、ここにも問題がないわけではない。第一に、すでに指摘したように、シラバス主義に則った場合、そこに明示された内容以外からの質問をして、それを成績評価に用いることは推奨されない。となると、テキストが事前に指定され、それが複数年次にわたって使用される限り（というか、現実的には、同じテーマの授業である限り）、出題範囲はおのずと限定されてしまう。

ところで、「その授業科目の内容として重要である」ということと、「小テストや課題として出題・利用しやすい」ということとは、全く別次元の問題である。体験的な実感として、1つの授業

科目の中で、「小テストや課題として出題しやすい部分（つまり、内容が曖昧でなく、多義的でもなく、正答が1つしかなく、短すぎも長すぎもせず、易しすぎも難しすぎもしない部分）」は、ごく少数ではないにしても、きわめて大量にあるわけでもない。このため、おのずと「ほどほどに答えやすい小テストや課題の、範囲や数や種類」には限度が出てくる。そうすると、指定テキストや授業科目が同一である限り、どうしても類似範囲からの出題となり、どんな出題だったかが、学生の間で記憶・記録・伝聞される限り、事前の対策が立てやすくなる。「議論や思考を触発する、正解のない質問」は、この文脈では必ずしも好まれない。なぜなら、「何が正解＝高得点か」が明示されていないと、獲得できる得点を事前に予想して「エコ」にふるまうことができないからだ。

第二に、このような小テストや課題類では、一定のありがちな「テンプレート的な回答」が存在しうる。さすがに30年も授業をし続けてくれば、そのようなテンプレの一般的なものには馴染みができてしまう（ここに数例を示してもいいくらいだが、ある意味それは自殺行為的なので、あえて差し控える）。そのため、ありがちないくつかの「回答テンプレ」を暗記修得しておけば、どんな課題や小テストでも、とりわけ自由記述の場合、それを適宜応用して、「よく似た、もっともらしい回答」を、いくつも即興することができる。これを防止するためには、各学生が各授業で提出した課題類を、すべて通覧できればよい（すると、色々な機会に同じようなテンプレの回答文を記していることが判明するだろう）が、近年の教員は、自分の担当した科目以外の成績などが分からないので、このような全体像を把握した上での評価ができなくなっている（ただし逆に、学生への先入観も持ちにくくなる。また、ある学生の提出物の

多くを通覧してチェックする作業は、相当な追加の労働時間を要するだろう)。そのため、もっともらしい「回答テンプレート」に遭遇して、そのような直感的疑念がきざしても、それをそれと判断する機会がないともいえる。

いずれにせよ、「出席しているということ」の積極的な根拠たりうる授業内での小テストや課題類にしても、同じ指定テキストに依拠した授業が何度か行われる限りにおいて、また、回答テンプレート類が流通する限りにおいて、それほど有効な評価の要因とはなりがたいと思える。なによりもそれは、最終的に「同じ講義内容から切り出された質問」であり、その限りにおいて、本質的に冗長である。そもそも多くの学習行為には、冗長な繰り返しが必須であるが、「内容の習得」を目的としないGPA視点からすれば、それは、「同じ事を繰り返しているだけ」という印象を抱かれやすい。

2-4. 期末テストとレポート

期末テストといっても色々なタイプがあるし、レポートといっても、自由記述に近いものから、知識・技能テストに近いものまで多様である。レポート類については、「その日その場で」執筆させるものではないため、あらゆる種類の執筆の可能性があり、オーサーシップや引用について、大量の検討すべき問題がある。そのため本論では扱いきれないが、本来ならば、検討されるべき喫緊の話題である。

筆者自身の場合、ごく少数の例外的な場合を除いて、参照不可の期末テストを、30年間近く、実施し続けてきた。この方式だと、オーサーシップや引用の問題に疑念が出にくいからである。そして、その出題方針は、できる限り、次のような、客観テストに近いものになっている。つまり、(1)

「講義を要約した文章中の空欄に、適切な語句を記入させる」、(2)「講義で説明した話題について、指定した数個のキーワードを正しく用いて説明させる」、(3)「講義で説明した話題について、できるだけ詳細に、講義に依拠して記述させる」、(4)「前2つのような問題に回答した上で、それについて、当人の意見を書かせる」という4パターンである。

20年ほど前に、このような形式で期末テストを実施したら、「入試ではあるまいし」という、かなり強い批判的な感想が学生から出たことを、はっきりと記憶している。シラバス主義の浸透した現在であれば、そうした拒否反応は、いっそう出にくくなっているかもしれない。上のようなテスト設問は、すべて、講義内容を、一定程度まで記憶してテストに望むことを要求している。

シラバス主義は、講義の形式と内容をあらかじめ固定して明示させるので、当然ながら、そのような講義の結果として実施されるテストや課題の出題も、その内容を反映し、それに対応したものでなければならない。講義で触れたり論じたりした内容を理解し、それに基づいて、それを再現したり(つまり得た知識を示す)、その再現に依拠した意見を示す(その前提として、内容を正確に把握していることが必要)、ということにならざるをえない。

GPA視点をもたない「いわゆる真面目な」学生の場合に、このようなシラバス主義の出題がもたらす不満や安心などについては以降で述べるとして、GPA主義の学生の場合に、この方式がもたらしうる問題について検討する。

第一に、このような授業で得られる知識・情報は、どの程度の時間経過にわたって記憶されていればいいのか、という問題がある。GPA視点では、授業内容そのものの記憶や保持や修得はあま

り問題とならないため、極端な話、テストの時点だけ、それが記憶されていればいい（参照物を許可されたテストの場合でも、一定の時間制限内で効率的に回答していくためには、事前に多少の内容を記憶しておく必要はある）。問題は、その記憶の保持時間の長さ、ということである。

一般には、期末テストで出題される項目というのは、その講義の中でも重要な部分であることが多く、つまりは記憶しつづけておいても悪くはない概念や考え方などだろう。とはいえ、このような内容志向の発想を、ここでいう GPA 視点では取らない。となると、どういうことになるだろうか。

最も極端な事例として、筆記試験に続けて面接試験があるような試験で、次のごとき経験をすることがある。つまり、学生が、筆記試験で回答できなかった出題について、面接試験の場で（多分あとから調べた）回答を口頭で開陳し、「そこで正しく回答したのだから、そのように対処してほしい」と要求する場合である。もちろん言うまでもなく、ある程度の広い出題範囲から出された質問に対して、“その試験場でのその試験時間内に”正確な回答を要求するのが筆記試験であり、設問を知った後、にわか調べで回答を作り出し、それを後続する面接試験で開陳されても、筆記試験への評価とはしにくいだろう。それでも、このような希望が出されることは時おりある。この事例では、設問を知り試験が終わった「後になっても」、それへの何らかの回答が用意できれば、それが評価される、と仮定されているわけだ。（形式的なテストではなく、授業内の課題としてなら、評価できる追加の事後的作業かもしれない。ただし、形式的テストでこれを評価することは難しい）。

筆者にとって、学校の授業内容とは、基本的に、

長期記憶として脳裏に保持されつづけるべき性質のものだった。たとえば筆者は、たまたま、Barrington Moore, Jr. について、35年前に1度だけ講義で聞いたのみであり、その後、この名前を1度も論文中で使う機会がなかった（いま、35年後に初めて使用した）が、今でもそれを普通に記憶したままである。筆者が受けた1回の講義とテストで使われただけの単語が、いまだに長期記憶として保存されているわけだろう。

これと対照的に、強い GPA 視点では、多くのものごとは短期記憶に保持されるか、保持されても、瞬時に消去される性質をもっているようにみえる。もし、テストに回答するその瞬間だけ、その情報が脳裏に存在していればいいのであれば、その保持時間は、限りなく短いものになりうる。テスト開始直前の数十分あるいは数分あるいは数秒で参照したノートやメモの内容を、その後のテスト時間内で書き出し、そのまま忘れてしまう、といった場合がありうるだろう。これら短期的に棒暗記された（この言葉はこのような事態にこそふさわしいと思う）回答の中には、当然、テストの「正解」である回答も、まますははずだ。しかしこれは、「正解したこと」として評価されるに相応しい回答（の背後の実態）だろうか？ それを記入した当人ですら、試験室から退室する時点ですでに記憶していないような「回答」は、それでも「正解」として評価されるべきなのだろうか？

もちろんその答えはイエスであって、ペーパーテスト形式で試験を実施している限り、それが実施された時点で答案に記入された回答以外に、判断の根拠とできるものはない。瞬時の棒暗記であれ、まったく唐突な思いつきであれ、たまたま目についた語句であれ、記入されたその文字が正解と一致していれば、当然ながらそれは、操作的に

いって正解として測定される。これらはペーパーテストがしばしば揶揄的に語られる理由でもあろう。とはいえ、このような、どちらかというとな責任な（ただし非常に同調的とも言える）回答をみると、果たして試験における正解とは、どのような性質であるべきものなのか、という疑念がきざさないわけにいかない。

民主主義社会の担い手としての責任ある個人には、十分な知識や情報に基づく、合理的な意思表明と意思決定が可能であることが前提とされている。それを保障するために義務教育課程が存在する。

とはいえ他方で、たとえば現実の選挙投票では、一般的な漢字4文字の姓名の候補者であっても、その姓だけを、ひらがなまたはカタカナで記入できれば（同姓候補がない限り）当該候補への有効票としてカウントされる。多くの選挙ポスターで候補者名がひらがな書きされているのは、ひらがなを認識し記入の方がより負担が少ない有権者が、少なからず存在しているからである。たしかに、例えば「齋藤繁雄」と記入することと、ただ「さいとう」と記入することには、はっきりした労力の差が存在する。

近年、テストを実施する際に、問題用紙の注意書きとして、「正しい漢字で記入しなさい」と付記しないと、ひたすらひらがな書きだけの答案を受け取る経験をする。筆者は、この出来事を、受験者の能力や知識が低下しているわけ（だけ）ではなく、むしろ努力する意図や意欲が（何らかの原因によって）高くないことの結果だと考えるようにしている。

ただまた、さらに、次のような事例も発生している。これは、第二の論点、すなわち、回答された試験内容を、字面だけではなく、果たしてどのように受け止めればいいのか、という問題であ

ろう。単純きわまりない穴埋めテストですら、それは起こる。

分かりやすい実例を示す。マスコミ研究には、メディアの「利用と満足の研究」と呼ばれる研究領域があり、それは通説として、1940年代に、マスコミ研究者ヘルタ・ヘルツォークが最初に行ったとされている。ヘルツォークは、当時アメリカで隆盛をきわめていたお昼のラジオドラマ、いわゆるソープ（ソープオペラ、ソープドラマ、石鹸会社が提供したためこう呼ばれる）の、主婦による聴取と利用のされ方を研究した。

以上の、ごく一般的なマスコミ研究史からテスト問題を出題して、「1940年代に、主婦によるお昼の（1）、いわゆるソープの利用を研究したヘルツォークは」云々、という文中の（1）に、適切な語を記入することを求めたとする（ラジオ研究であることを学んだかを確認するための設問）。すると、近年では、この（1）への回答に、「風俗」「セックス」といった記入例が数件みられたりするわけだが、このような回答は、いったい何なのだろうか？ それは、ものの分かった非GPA主義の学生のとぼけたジョークなのか。あるいは、社会史家ジェームズ・スコットのいう「弱者の武器 weapons of the weak」（Scott, 1985）の使用実例とみるべきだろうか？ それともたんに、履修科目がマスコミ研究史であることを自覚していない、相当地に自由な想像力の怠惰な暴走の結果なのだろうか？あるいはさらに、本来なら正式の「ソープオペラ」「ソープドラマ」等と出題すべきところを略記して出題した筆者への、暗黙裡の、好意的で自己犠牲的な批判意図の発露なのだろうか？ これは、正直、判断の分かれるところだと思うし、このような回答の前で、しばらく採点の筆が停止してしまうこともままある。もちろん件数は多くないにしても、このような答案を判断す

る、ということも、近年の試験採点には含まれていると言わざるをえない（幸か不幸か、この事例では、その意図がなんであれ、これらは不正解の回答であるが）、純粋な穴埋めテストにして、これである。自由記述で出題した際の困難は、これに数倍するものになってしまうだろう。

教室の機能も多様化していることは事実である。ただし一般的にいて、それは自己表出や自己パフォーマンスのための場所では必ずしもない（なかった）だろうし、出題者を困惑させる回答パフォーマンスを実演してみせるための試験時間でもないはずである。といって、内容の修得が目的とされないGPA視点からその場に臨めば、あらゆるワイルドな即興の余地がありうると感じられても無理からぬことだろう（単位が取れさえすればいいのだから）。となれば、「真面目な出題への真面目な回答」という、かつて疑われることのなかった公教育のペーパーテストにおける大前提が緩和され、別方向へと勝手に展開している可能性も否定しきれない。また、もしそうであるならば、それはそれで、必ずしも「悪い」ことだとも筆者は思わない。のびやかな感受性の自由な発露に微笑しつつ、減点すればいいだけなのかもしれない。ただし、そのように明示されないことは、単純に、採点の判断に手間がかかるので「迷惑」ではある。また、このようなテスト対処法がじっさいに得点につながると錯覚している一定数の学生もいるだろうし、他方では、伝統的な「真面目な」回答を出そうと苦闘している、多くの受験者もいまだ存在しているのだ。

繰り返すが、GPA視点からすれば、このような「逸脱」が、必ずしも間違っただけのものではないことには注意すべきだろう。ただし、根本的な問題として、そもそもこの視点を採用している学生に対して、そうではない学生と同様の判断・対処

基準でのぞむべきなのか、という疑問はありうると思う。

3. 中間的結論

当初、筆者は、単に「出席している、ということ」を、厳密に（現に出席している多くの学生の労力に報いられるように）測定したいと考えただけなのだった。にもかかわらず、以上に略記（これでも素描にすぎない）したような、多くの考察すべき問題が現れてくる。幸運なのは、これらの特異的な事態は、まだ頻度としては、さほど多発していないようだ、ということだろうか。「出席」現象ひとつを取り上げても、授業の全体や、その社会的意味についての考察につながらざるを得ない。このあたりに、授業を論じることの基本的な難しさがあるように思える。「GPA視点」がある程度一般化していることも、教室の基本的な機能を再考察せざるをえない一因となっているようにみえる。

この研究では、当初から、デジタル装置などを採用した「厳密かつ効率的な出席管理」を研究課題とし、数次にわたる実証実験を運用した。しかし、試行結果を検討すると、その結果報告や、今後の可能性の検討以前に、以上のような基本的な考察が必須と考えられた。デジタル装置は文字通り「機械的に」対応するので、「それ以前には曖昧なまま通用していたものごとを、いやおうなく、1か0かに分類して明証化しようとする」ため、この結果、曖昧なるがゆえに機能的だったものが問題化され、矛盾が露呈する場合も頻発する。本件はその好例だろう。

とはいえまた、学生にせよ教員にせよ、類似のデジタル装置による管理下で、日常生活を営まざるをえないという新しいリアリティが存在しはじめている。1回の出席欠席の背後にも、これまで

には問題とならなかった、これまでには存在しなかった、多くのより広範な動機・理由・原因などが潜んでいるであろうし、それを理解するための社会学的想像力が要請されているようにみえる。本論は、そうした方向への第一歩として準備された。

*この研究は、本学の2014年度特別研究助成、研究課題「小規模CSCWシステムを利用した集合行動促進の実証的研究」中の、課題の1部（出席管理法の実証研究）として実施されている。ただし、これは標記課題の付随的な1部であってそのものではないので、本論の題名も、この研究課題と同一にはできなかった。筆者はここ5年間ほど、大教室授業における厳密で効率的な出席管理法についての実証的な研究を、自分が担当したクラスを実証対象として、散発的ながら継続的に実施してきた。本論は、当初、その実証研究の結果報告のみを意図していた。だが、作業結果を検討してみると、いっそう根本的な、「授業をすること、それに出席すること」全般に関わる

現実的な理論的考察が先行して必要だと考えられるようになった。実証作業のいっそう具体的な結果は、本論の続稿として、今後に報告の予定である。以上、付記して説明した。

参考文献

- Bekcer, H. S., Geer, B., and Hughes, E. C., *Making The Grade: The Academic Side of College Life*, Transaction Edition, 1995 (Orig. 1968).
- Fingerson, L., *Girls in Power: Gender, Body and Menstruation in Adolescence*, SUNY Press, 2006.
- Hochschild, A. R., *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, Univ. California Press, 1983. (石川准・室伏亜希 訳『管理される心——感情が商品になるとき』, 世界思想社, 2000.)
- Scott, J. C., *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, Yale Univ. Press, 1985.

**On Being Present: A Social Psychology of Classroom Attendance Behavior, Part 1 ,
GPA Perspective Cases**

GOTO Masayuki

Abstract

The author, a nearly 30-year long educator having taught at various universities and research institutions, discusses problems of classroom attendance and students' psychology of class taking, mainly from a specific type of students' mind-set, which is here called as "GPA perspective," in this Part 1 of a series of intended research reports. GPA perspective is a concept used by sociologist H. S. Becker and collaborates in 1968, a concept that refers to an attitude of students who are only interested in grade-getting and nothing other. Since a GPA perspective-oriented student is motivated to nothing but to acquire the best possible GPA while paying the least possible effort, some untraditional behaviors in classrooms are frequently enacted and observed. The author, a specialist of symbolic interactionism sociology, describes many concrete instances of GPA perspective-oriented students' not-before-seen behaviors in classroom, their attitudes and opinions explicit and implied in classroom interactions, particularly focusing on one but many faceted aspect of educational process: classroom attendance.

**KEYWORDS: GPA perspective, higher education problems, classroom attendance,
digital management of classroom**